

俳句

かわぐち しげみ
川口重美

下関市・山口市
(1923～1949)



【著作】
『川口重美句集』
(昭和38年8月30日・発行者 川口達仁)
『川口重美句集 復刻版』
(平成20年10月・発行者 「山繭」発行所)

ー代表句ー

見てをれば鶏頭の門に入りけり
トマト囃むや沖の没日が火の車
渡り鳥はるかなるとき光りけり
秋は絡まぬ石切槌の二挺の音
木兎の杜ゆく愛音吸ひとらる
ズルテルに朱線引き諸小粒も食ふ
二者扱一夜寒の時計すぐ巻き終ふ
秋風のかゝる香かつて希望ありき
秋風や添ひゆく柵のふと切れぬ
返り花暮る、ほかなし汝が名呼ぶ
寒雷に響けるがにも白き飯
貝寄風や母へかさなる記憶のひと
かなしからずやチューリップ影もチューリップ
炎天の鶏まつ毛なきまばたきを
白服の答のごとくに佇てりけり
手花火のころろの中に散るごとし
炎天の羽音や銀のごとかなし
耳に手をおほへばひびく秋の雨
炎天下穴に沈めり穴掘りつ、
野火を見てきて椅子が持ち去られぬし

(『川口重美句集』より)



『川口重美句集』

川口重美

川口重美 年譜

大正12(一九二三年)	二二歳
昭和11(一九三六年)	二二歳
昭和12(一九三七年)	一四歳
昭和16(一九四二年)	一七歳
昭和17(一九四二年)	一八歳
昭和19(一九四四年)	二〇歳
昭和21(一九四六年)	二二歳
昭和22(一九四七年)	二三歳
昭和23(一九四八年)	二五歳
昭和24(一九四九年)	二五歳
《没後》 昭和38(一九六三年) 平成20(二〇〇八年)	

7月21日、下関市川口家に生まれる。
3月、下関市菁莪小学校卒業。
父松市死去。
3月、下関中学校卒業。卒業後、家計のためしばらく内務省港湾関係に就職する。
4月、旧制山口高等学校理科入学。山口市吉賀家へ下宿し、主の吉賀トラを母のように慕う。
6月、母アキ死去。
7月、初めて句作、梶太と号する。後、俳誌『風』、『寒雷』、『万緑』、『しぎの』等に句作する。
9月、山口高等学校理科卒業。
10月、東京帝国大学第二工学部建築学科入学。
1月、吉賀トラ死去。
俳誌『風』第3号(7・8月号)に初めて句作し掲載される。
『青表紙とちて寝に立つ火蛾の夜 千葉 川口梶太』
この頃、下関市で六歳年長の未亡人Kと知り合う。
秋、下関市正田家の婿養子となる。
2月、東大二工学寮俳句会に入会(後に東大二俳句研究会に改組、重美はその幹事となる)。この頃、千葉でKと同棲。妻も重美を追って千葉に住む。
夏、梶太を改め本名の重美を名乗る。俳誌『風』では第21号から川口重美となる。
3月、『風』同人に推される。東大卒業。下関市に帰る。
4月15日、山口市内の旅館で自死。

た。その後、上野氏から山口県立大学郷土文学資料センターに寄贈されている。没後十四年目に上野氏ら親交のあった友人や遺族の手によって句帖の全作品から三百句が選ばれ、『川口重美句集』が刊行された。重美自身の手により抹消されていた句もあったが、選者の判断により佳句は収録された。
評伝としては、『風』昭和四十年三月号二百号記念特集に掲載された沢木欣一による「川口重美聞き書き」が詳細である。昭和五十年九月に山口市で発行された『単騎の会詩誌第3号』でも川口重美特集が組まれており、参考文献等よくまとめられている。
最後に若き日に重美と上野氏の間で交わされた会話を紹介する。上野氏が問う「俳句とは何だい」、重美「詩だよ」、重ねて問う「詩とは何だい」、一瞬置いて答える「詩とは驚きだよ」。

(文・杉山みゆき)



自筆句帖

句碑風景

(提供・杉山みゆき)